

## 教科書教材を「読む」(IV)・あまんきみこ「おにたのぼうし」論

木村 功

小学校三年生の国語科教材として採録されている、あまんきみこの「おにたのぼうし」は、おにたという黒鬼の子どもと人間の女の子の交流を通して、他者を理解することの困難を主題化した作品として評価されている。本論では、善意の持ち主でありながら、人間には受け入れられない悲劇的な他者として位置づけられるおにたが、受け入れられないことを受け止めつつ「おにたにも、いろいろある」という主張を貫く、その葛藤と変容の過程を読み取ることを最重要視した。そうすることによって、他者を同情や憐憫の対象とする態度を相対化し、他者への距離をこちら側から縮めることが可能になると考えるからである。

Keywords : 鬼、他者、同化志向、デイスコミュニケーション、自己実現

「おにたのぼうし」は、一九六九年七月にポプラ社から発表された。教科書への採録は、一九八六年の教育出版(小学三年生)である。あまんきみこは、この作品のあとがきに、以下のような言葉を寄せている。

子どものころ、わたしは豆をまきながら、追いだされるオニのことを思いました。家のまどのすきまからにげだしていくオニどものイメージは、どこかこっけいで、そして、いささか哀れでした。(中略)

ところで、文明の発達とともに、オニの魔力威力も、地におちました。どうも、このごろのオニは、帽子をかぶりたがっている気がします。そして、トラの皮をまとった自らの姿をはじて、オニオコゼどころか、雲霧四散したがつているようにさえ思われてきました。<sup>(注1)</sup>

この作品が発表された同年七月二〇日には、米国のアポロ一一号が月面に着陸するという人類史上初めての壮挙を成し遂げている。それが米国と旧ソビエトとの軍拡競争の産物である点を除けば、《文明の発達》が一つの頂点を迎えたことを示す出来事であったといえるだろう。そのような同時代の《文明の発達》を見据えながら、あまんは《オニの魔力威力も、地におちました》と語り、その一方で《オニ》の一人である「おにた」を人間の世界に登場させたのである。爾来現在に到るまで、四〇年近い歳月が経過した。

古来より災厄の象徴と見做され、節分には豆を以って屋内から追い祓われた鬼は、現在昔物語に見られるようなリアリティを失った存在となっているようだ。現代の怪談を一〇巻にわたって蒐集した木原浩勝・中山市朗『新耳袋』(メディアファクトリー)においても、鬼については天井に鬼の顔が現れたというだけのもの(第二巻第七九話)、その容姿がどのような特徴を備えていたかという所まで記述されることがない。あまんが《オニの魔力威力も、地におちました》と述べたレベルは既に通り越して、現代のフォークロアにおいてその姿を失うまでに鬼は退化してしまっている。言い換えれば、節分・豆まき・鬼という旧慣習や伝承を示す単語は残っても、その背景にある精神文化としての民俗が失われているのである。鬼の存在がほぼ失われ、節分の行事も形骸化していく現在にあって、「おにたのぼうし」の世界を讀者(生徒)たちの意識にどう接続していくかが一つの課題として浮上してきている。

現在「おにたのぼうし」をめぐる文学教育の現場では、《おにた》の生の円

岡山大学教育学部国語教育講座 七〇〇―八五三〇 岡山市津島中三―一―

A Study on Kiriko AMAN's "ONITA no Boshi"

Takumi KIMURA

Department of Japanese Language Education, Faculty of Education, Okayama University, Tsushima-naka, Okayama 700-8530

環と女の子の生の円環は決して交わることなく閉ざされている。いいかえると、「おにた」と女の子が、いかに対峙しえないか、二人の生のかたがいがいかに異なるかを『おにたのぼうし』は描き出している(注2)というように、概ね自己と他者の断絶をめぐる物語として読むことで、その断絶をどのように読者(生徒)が捉え直し、内面化するかという問題が論じられている。本論でもその問題意識を踏まえながら、文学教材としての新しい可能性を以下に考察してみたい。

—

まず分析で注目したいのは、物語が展開される時空が節分の夜(立春の前日)であるという点である。そもそも節分の豆まきは、鎌倉時代まで朝廷で一二月晦日の夜に行われた追儺の儀式に発している。室町時代には、節分の「方違え」で恵方の部屋の厄除けのために豆がまかれるようになった。厄除けの行事として、神社や庶民の間に広まったのは江戸時代のことである。しかし現在節分の豆は、恵方寿司と共にスーパードコンビニに並ぶ季節商品となり、豆まき自体が家庭でほとんど顧みられなくなった行事の一つと化してしまった感がある。

節分の夜のことです。

まこと君が、元気に豆まきを始めました。

ばら ばら ばら ばら

まこと君は、いりたての豆を、力いっぱい投げました。

「福はあ内。おにはあ外」

茶の間も、客間も、子ども部屋も、台所も、げんかんも、手あらいも、ていねいにまきました。

冒頭の場面でも豆まきは、一見惰性化した行事として描かれているように見えるが、まこと君が「いりたての豆」を「力いっぱい」、家中のあちこちに「ていねいに」撒くあたりに、厄除けの実効性を上げるための配慮を認めることができる。それは同時に、女の子が母親の病気の回復を祈って、豆を撒こうとしたことのリアリティを支えることにも接続していくだろう。節分の豆まきは、「おにたのぼうし」発表の時点ではまだ民俗精神に根ざした伝統行事として描き出されているのである。

その上で「まこと君は、いりたての豆を、力いっぱい投げました」とある部分が、最後の場面の女の子の「とてもしずかな」豆まきと対照関係を成すことは見やすいであろう。ただこの対照では、女の子の豆まきが「とてもしずかな豆まきでした」と語られるように、まこと君の発した「福はあ内。おにはあ外」という豆まきの掛け声を発していない点と、「ばら ばら ばら ばら」という擬音が、まこと君の豆まきと比べて一行分多く書かれているという点が考慮される必要がある。この二点の問題については、後述したい。

以下、おにたがどのように描かれているかを見ていこう。

その物おき小屋の天じょうに、去年の春から、小さな黒おにの子どもが住んでいました。「おにた」という名前でした。

おにたは、気のいいおにでした。きのうも、まこと君に、なくしたビー玉を、こっそり拾ってきてやりました。(中略)

豆まきの音を聞きながら、おにたは思いました。

「人間っておかしいな。おにはわるいって、きめているんだから。おににも、いろいろあるのにな」

そして、古い麦わらぼうしをかぶりました。角かくしのぼうしです。

おにたは「物おき小屋の天じょう」に隠れ住んでいる。鬼の子どもが人間の世界を来訪するのではなく、既にその世界中に「住んでいる」のである。さらに、人間に奉仕するというわけではないが、「(気のいい)親切な鬼であり、(はずかしがり屋)の鬼でもあるというナイーブな内面さえ付与されている。このことからおにたが、災厄をもたらすという一般的な鬼像ではなく、人間への同化志向を備えた鬼として描かれていることが指摘できよう。

ちなみに浜田広介「泣いた赤おに」(初出「カシコイ二年小学生」一九三三年、原題「鬼の涙」)に見られるように、「やさしい、すなおなおに」で、「できることなら、人間たちのなかまになって、なかよくくらしていきたいな」という、同化志向を備えた鬼像は既に提出されているが、「赤おに」の居住していたのは「山のがけの所」にある家であり、きこりや村人などが居住する人間世界とは空間的に一線が画されていた。この点で、人間社会への同化志向の度合いでは「赤おに」に及ばないにしても、おにたはおにたで鬼と人間世界との境界を越えてしまっているのである。

おにたの同化志向は、「人間っておかしいな。おにはわるいって、きめてい  
るんだから。おにも、いろいろあるのにな」という独白にも認められるだ  
ろう。言うまでもなくこの一文には、「おにもよいおに」がいるという含意  
が認められ、それが他ならぬおにた自身を指していることは明らかである。教  
科書版の本文では、鍵括弧で示されているが、絵本版ではこの部分は丸括弧で、  
おにたの内言として示されている。また〈にんげんも、いろいろ いるみたい  
に〉の一文が、絵本版では続いている。村上呂里に、〈この言葉は、「おに」と  
して一括りにとらえる「にんげん」への抗議であるとともに、「おにた」とい  
う固有の個として生き、認められたいという、現代を生きる存在としての願い  
を読みとることができるだろう〉<sup>(注4)</sup>という指摘があるように、おにたは人間の  
「鬼」悪」という通念に疑義を呈し、鬼にも人間同様の個性があるのだと説  
く鬼として描かれており、読者の「鬼」悪」という「一般常識」を転倒しよ  
うとしているのである。それと同時に、絵本版のおにたが、人間を相対化するこ  
とで、鬼と人間を対等視している点も看過できない。鬼も人間も「いろいろあ  
る」と主張するおにたの前に、人間である読者の特権性は剥奪されるのであり、  
少なくとも読者にはおにたという黒鬼の子どもを、対等の存在として処遇して  
いくことがテキストから要求されている。そしておにた固有の視線に同化した  
読者は、おにたの視線から、女の子とのコミュニケーションの可能性を期待し  
ながら物語を読み進めていくことになるのである。

さてそのおにたは、まこと君が〈ていねいに〉物置小屋にも豆を撒いたこと  
から、出ていかざるを得なくなった。その際おにたは、〈古い麦わらぼうしを  
かぶりました。角かくしのぼうしです〉とあるように、おりしも節分の夜とい  
うこともあって、おにたの特徴である「角」を隠す。そうすることで、おにたは  
自分が鬼であることを隠蔽し、人間からの豆による攻撃を回避しようするので  
ある。これを、前出村上のように、〈あくまで「にんげん」＝文化共同体のま  
なざしが強い偽装であり、「おにた」と「にんげん」の交通の象が現時点で  
は「ぼうし」でしかありえなかったということである〉<sup>(注5)</sup>と見る意見がある。し  
かし、おにたが最初から人間世界に居住することを選択している鬼である以上、  
〈強い擬装〉という見方は、おにたの有する人間社会への同化志向を看  
過することになるだろう。おにたが麦わら帽子を被るのは、あくまで節分の夜  
に鬼であることを隠すことで、人間世界から排撃されるのを免れようとする自  
衛行為であることを確認しておきたい。

こな雪がふっていました。道路も、屋根も、野原も、もうまっ白です。お  
にたのはだしの小さな足が、つめたい雪の中に、ときどき、すぽっと入りま  
す。

「いいうちが、ないかなあ」

でも、今夜は、どのうちも、ひいらぎの葉をかざっているの、入ること  
ができません。ひいらぎは、おにの目をさすからです。

粉雪の降る厳冬の夜、小さな黒鬼が、白々とした風景の中を次の家を探して  
彷徨っているいじらしい様子が、思わず想像される場面である。しかしその一  
方で、〈今夜は、どのうちも、ひいらぎの葉をかざっているの、入ることが  
できません。ひいらぎは、おにの目をさすからです〉と、語り手はおにたがあ  
くまで〈おに〉であり、彼の同化志向とは別に、人間世界からは排除されるべ  
き他者であることを示している。

それでもおにたは、〈小さな橋をわたった所に、トタン屋根の家を見つけま  
した〉。おにたは、この家に〈豆〉の匂いがしないこと、〈ひいらぎ〉も飾られ  
ていないことに気づく。鬼であるおにたにとっては、都合の良い家であった。  
トタン屋根は、瓦屋根に比べると安価な屋根であり、〈でこぼこしたせんめん  
き〉同様、女の子の家庭の経済状況を暗示する指標になっている。〈豆〉と  
〈ひいらぎ〉が無いことも、この経済状況と関連している。また、おにたが家  
の中に侵入した後には天井の梁から認めた、〈部屋のまん中に、うすいふとんが  
しいて〉あることや〈新しい雪でひやしたタオル〉なども、厳しい寒さの時期  
であるにもかかわらず〈うすいふとん〉しか使えない困窮や、水道が使えない  
逼迫、そして何よりも母親の病気という厳しい家庭の状況を物語っているの  
である。

このように女の子とその家庭は、まこと君のように〈豆〉を撒いたり、ある  
いは〈ひいらぎ〉を飾ったりすることの出来る家と比べて、下位階層として物  
語世界の中で差別化されており、ここに人間社会に同化志向を持ちながらも、  
鬼であることで人間から拒絶されるおにたとの交流の端緒が開かれることにな  
る。しかし、おにたが女の子に関わっていくのは、〈豆〉や〈ひいらぎ〉が無  
かったことだけがその理由なのではない。

「おなががすいたでしょう？」  
 女の子は、はっとしたようにくちびるをかみました。でも、けん命に顔を横にふりました。

そして、  
 「いいえ、すいてないわ」と答えました。

ここで女の子は母親から図星を指されているのだが、病気の母親は娘のために食事を用意することができない。そんな母親の心情を察した娘は、心配をかけまいとして一生懸命「おなががすいた」ことを否定しようとしている。再び眠りに就いた母親の姿をみた女の子が「フーツと長いためいきをつきました」には、母親が眠りについたことへの安堵ばかりではなく、「おなががすいた」状態は改善されようもないので、その厳しい現実を受け入れざるを得ない遣る瀬無い気持ちがない交ぜになっている。おにたが目に留めたのは、幼い子どもが母親を気遣う、このような切ない光景に他ならなかった。おにたは、女の子の言動から、察するものがあつたのだろう、以下のような行動に出るのである。

おにたは、なぜか、せなががむずむずするようで、じっとしていられなくなりました。それで、こっそりはりをつたって、台所に行ってみました。

「ははあん——」

台所は、かんからかんにかわいています。米つぶ一つありません。大根一切れありません。

「あのちび、何も食べちゃいないんだ」

おにたは、もうむちゅうで、台所のまどのやぶれた所から、さむい外へとび出していきました。

女の子の言動に、母親に対する気遣いを見て取ったおにたは、その理由を、台所で見出したのである。そこには、〈米つぶ一つ〉〈大根一切れ〉も見当たらない〈かんからかんにかわいた〉台所があつたのだ。〈気のいいおに〉であつても鬼ゆえに姿を人間の前に現すことができないおにたは、空腹であつても病気の母親にそのことを言い出せない女の子の優しさに共感したのである。ここに到つて、おにたの女の子に対する親愛の思いが募っていることが、〈「あのちび」という言葉や、その後〈もうむちゅうで〉、〈さむい外へとび出して〉

行った姿に認められる。

このように語り手は、女の子に対するおにたの親愛感が昂進していく様を描き出すことで、おにたが遂に人間の前にその姿を現すに到るその理由、すなわち自分の空腹を我慢して母親を看病し思いやる女の子であればこそ、おにたを受け入れてくれる可能性を見出していることを描くのである。田中実にも、〈ようやく彼は自分が求めるべき相手に出会つたのである。自分の方から人間の前に出るに相応しい相手を見いだし、果敢にその人の前に現れる。その子は母親の前で、自分を隠していたのであり、しかも、それは当の母親のためである〉、〈この女の子なら、自分の寂しさが分かつてくれるのではないか〉という指摘がある。〈果敢にその人の前に現れる〉というよりも、それはおにたの人間に対する同化志向・親愛感の一方的な高揚によつて女の子の前に姿を現したと解すべきであるが、このようなおにたの姿は、兵十に一方的に贈り物を繰り返すことで、自分の存在に気づいてほしいと願つたごんぎつねの姿を髣髴とさせる。

女の子が出ていくと、雪まみれの麦わらぼうしを深くかぶつた男の子が立っていました。そして、ふきんをかけたおぼんのようなものをさし出したのです。

「節分だから、ごちそうがあまつたんだ」

おにたは、一生けん命、さつき女の子が言つたとおりに言いました。

女の子はびっくりして、もじもじしました。

「あたしにくれるの？」

そつとふきんを取ると、あたたかさうな赤ごはんと、うぐいす色のに豆が、湯気をたてています。

女の子の顔が、ぱつと赤くなりました。そして、にこつとわらいました。

この場面で語り手は、女の子から見た「おにた」の姿を描写している。読者には、おにたがはじめて人間の前に姿を現していることが了解されているのだが、女の子はそうではない。鬼が追い祓われる節分の夜であるからこそ、目の前に〈ごちそう〉を持った鬼が現れることなど思いも寄らないということもあるだろう。〈雪まみれの麦わらぼうしを深くかぶつた男の子が立っていました〉とあるように、真冬に麦わらぼうし姿という不自然な恰好ではあるが、おにた

は鬼ではなく人間の男の子として認知されることに成功している。このことは、少なくとも外見上では鬼と人間という隔絶が消去されていると考えてよく、この場面はおにたの人間に対する同化志向が叶えられた奇跡的な瞬間を捉えているのである。

事実(女の子はびっくりして、もじもじしました。)とあるのも、それは見知らぬ男の子が、どうして自分に節分のごちそうをくれるのかびっくりして戸惑っているからであって、鬼と認知しているならこのような反応は望むべくも無い。女の子はさらに、そのごちそうが自分が母親に話したとおりのものだったことから、自分の願望がかなえられた喜びやなぜそれを男の子が知っているのかという羞恥心と困惑が混在した感情を、(「ぱつと赤く」という表情で示している。そして続いておにたに向かつて「へこつとわら」うのであるから、ここに女の子から男の子に対する感謝が伝達されたことが読み取れる。

それはおにたからすれば、本来この節分の夜にあって排除されるべき鬼である自分の、(「あたたかそうな赤ごはん」や「湯気をたててい」る煮豆に込めた女の子への親愛の思いが、その笑顔という直接的な感謝によって報われた至福の瞬間が訪れたことを意味している。同化志向を持つ「(気のいいおに)」が、人間の前にはじめて姿を現した節分の夜に、自分の行為に対してはじめて人間から感謝され、おにたははじめて報われたという僥倖の瞬間を味わったことであろう。

かくしてここに、鬼と人間との間でコミュニケーションが成立したように見える。しかしそれは、女の子から見ればあくまで男の子との間で成立したコミュニケーションに他ならず、女の子とおにたの間で成立したものではなかったのである。

二

前章で指摘したおにた(鬼)と女の子(人間)との間のディスコミュニケーションの問題は、すぐに顕在化することになる。

女の子がはしをもったまま、ふっと何か考えこんでいます。

「どうしたの?」

おにたが心配になってきくと、

「もう、みんな、豆まきすんだかな、と思ったの」と答えました。

「あたしも、豆まき、したいなあ」

「なんだって?」

おにたはとび上がりました。

「だって、おにたが来れば、きつと、お母さんの病気がわるくなるわ」

おにたは、手をだらんと下げて、ふるふるっと、かなしそうに身ぶるいして言いました。

「おにだって、いろいろあるのに。おにだって……」

氷がとけたように、急におにたがいなくなりました。あとには、あの麦わらぼうしだけが、ぼつんとこのこっています。

(中略)

「このぼうし、わすれたわ」

それを、ひよいともち上げました。

「まあ、黒い豆! まだあつたかい……」

(「ふっと何か考えこんでいる」女の子を心配しているおにたに対し、この後に続いた女の子の言葉は、報われた満足感に包まれていたおにたを突如奈落に突き落とすものであった。女の子にごちそうを贈ったおにたの親愛の思いに対して、女の子から「あたしも、豆まき、したいなあ」という言葉が発せられたことで、改めておにたには自分と人間の間に横たわる決定的な断絶を再確認させられたのである。

しかし女の子は、節分の夜ということとただ習慣的に豆まきをしたと言っていたのではなかった。(「だって、おにたが来れば、きつと、お母さんの病気がわるくなるわ」というように、母親の病気がこれ以上悪化しないよう鬼を追いやるために豆まきをしたと言っているのである。節分の夜に、鬼から病気の母親を守るうとする女の子の心は、取りも直さずおにたが惹かれた母親を氣遣う優しい心であったが、同時にその心がおにたを追いやることになるといいう皮肉な事態がここに出現する。勿論、女の子の母親を守ろうとする気持ちがおにたに通じないはずはない。(手をだらんと下げて、ふるふるっと、かなしそうに身ぶるい)するおにたの様子には、葛藤を経て諦めにいたるおにたの心境の推移が見取れるようである。

そうしておにたは、ここで「おにだって、いろいろあるのに。おにだって

……」と、人間の前で鬼の立場から最初に最後の発言をするのである。まこと君の家の物置から出るときにも、語り手によっておにたの思いが記述されているが、最初の方では「思う」のに対し、この場面では「言う」のである。おにたは自分が、人間にはどうしても受け入れられない「鬼」であるという現実<sup>(注10)</sup>に打ちのめされ、そしてそれを悄然と受け入れながらも、女の子に対して鬼である自分の思いを訴え出ないわけにはいかなかったのである。

しかしそれでもおにたは、母親を案じる女の子のために、(気のいいおに)としての最後の行動を採らないわけにはいかなかった。なぜならば、人間が鬼を拒絶することは鬼であるおにたにとっても常識なのだから、そのような人間の態度を目の当たりにして怯んでいるようでは、おにたが日頃主張する「人間間っておかしいな。おにはわるいって、きめているんだから。おににも、いろいろあるのにな」という考えを自ら撤回してしまうことになるからである。おにたが、「おににも、いろいろある」ことを貫くためには、女の子から与えられた拒絶を超越しなければならなかった。そしてそれこそが、自らを節分の豆に変えることであつたのである。

かくして、まこと君の豆まきによつて「おににも、いろいろある」と思ひながら、ただ物置小屋から出ていくだけにとどまっていたおにたは、「おににも、いろいろある」と発言するとともに、女の子に豆まきをさせてやることで、「おににも、いろいろある」ことを実際に具体化したのである。

先行研究ではおにたの豆への変身について、(女の子の夢に殉じるかたちで豆に身を変え消滅してしまう) (幼い命を消滅させていってしまう) (おにたは命に代えて愛する者の望みをかなえた) など種々の解釈がなされている。しかし、それらはおにたの行為を女の子の中心に捉えたものであつて、おにた自身に即した意味については捉え損ねている。確かに豆が鬼を追い祓うアイテムである以上、節分の夜にその豆に変じたことは、おにたが鬼である自分自身を否定する行為に他ならず、鬼として象徴的な死が演じられていると解釈できるだろう。ただ、それを女の子のためだけの行為として解釈すると、おにたの行為は自己犠牲以外の何ものでもないように読者に強く印象付けられてしまう。しかもその自己犠牲は、おにたの行為の対象である女の子が、そのことに全く気づくことがないことから、更に悲劇性を帯びることにもなる。

しかし前述したように、一見自己犠牲に見えながら、それがおにたの日頃の主張の具現化であつたことに想到すると、おにたの行為は「自己実現」として

も把握できるのである。おにたが、鬼を追い祓う豆に変身することを自らの意思で選び取った時、鬼祓いのアイテムは、おにたの自己実現を表す道具へと変換されたことになる。

付け加えておくと、おにたが黒い豆になったからといって、実際に死んだことになるとはどうかは判然としない。少なくとも豆が「黒い」ことや、「まだあつたかい」ことから考えて、この黒い豆が、おにたが変じたものと解釈するのは受け入れられるだろう。そして、おにたがその力で黒豆に変身できるのであれば、たとえ散らばつていても、また元の姿に戻ることもできる様に考えられるのである。

ともあれおにたの行為は、女の子のためには確かに自己犠牲の側面もあるが、「おににも、いろいろある」という日頃の主張をわが身を以つて具体化した「自己実現」の行為でもあつたことを確認しておきたい。

「福はあ内。おにはあ外」

麦わらぼうしから、黒い豆をまきながら、女の子は、

「さつきの子は、きつと神様だわ。そうよ、神様よ……」と考えました。

「だから、お母さんだつて、もうすぐよくなるわ」

タイトルにもある「おにたのぼうし」とは、直接的にはおにたが被つていた「角」隠しのための麦わら帽子のことである。田中実は「おにた」は「つのかくし」のぼうし、「おにたのぼうし」によつて自分の存在を隠蔽し、たものと考え、それが「おにた」という一人の存在に固有の愛し愛されるべき主体であること<sup>(注11)</sup>を留保してしまつている点を問題視する。

しかし先に確認したように、麦わら帽子は節分の夜に鬼であるおにたが人間から身を守るための自衛の道具であり、それは後で女の子におにたを(男の子)として受け入れさせることに一役買ったものでもあつた。つまり隠蔽・留保というよりも、隠蔽・自衛こそが麦わら帽子の機能なのである。それはまた人間への強い同化志向を持つおにたにとって、軋轢を避ける意味で用いるに相応しい小道具であつた。したがつてその麦わら帽子が最後に残されたことは、おにたが隠蔽・自衛の姿勢を必要としなくなったからに他ならない。なぜならば、おにたは「おににも、いろいろある」という自らの言葉を証明するために黒い豆に変身したのであり、それはおにた自身の更なる成長を意味していたからで

ある。病気の母親の回復を祈る女の子のために、自分の思いを封じ込めて自己犠牲を選び取ったおにたの心の強さ、そして「おににも、いろいろある」ことを体現して見せたことが「おにたのぼうし」が示すもう一つの相に他ならない。

そのようなおにたを女の子が、「さっきの子は、きつと神様だわ。そうよ、神様よ……」と考えたことは、おにたの行為が神様に匹敵する行いとして認められ称揚されたように見える。しかし、黒鬼の子どもであるおにたが、自分が神様と見なされたことを喜ぶかどうかは疑問である。それというのも、「おににも、いろいろある」といって、あくまで鬼を一般的に捉えるのではなく、個別性で捉えて欲しがっていたおにたであつたからである。その意味でおにたは、あくまで「気のいいおに」としての自分を認めて欲しかったはずである。それは、最後に発した言葉にも明らかに読み取れることだつた。しかし、女の子がおにたの発言を顧慮することはなく、神様扱いするのである。神様にされてしまったおにたは、最後までその願望を叶えられることはなかつた。人間と鬼との境界は、截然と引かれたまま物語は終結することになる。

ばら ばら ばら ばら  
 ばら ばら ばら ばら  
 ばら ばら ばら ばら  
 とてもしずかな豆まきでした。

前述したように、この最後の場面の女の子による豆まきは、冒頭のまこと君の豆まきと対照関係にある。それは、母親が目覚まさないよう静かに豆を撒いていることにもよるが、それだけではない。へばら ばら ばら ばら という豆まきを表す擬音が一行分増えていることは、それが母親の快癒への祈りや神様への感謝がこめられた豆まきであることを物語っているだろう。しかも、まかれていた豆は、本来豆によって追い祓われるべきおにた（黒鬼）なのであり、ここには豆まきという節分行事が、当の鬼自身によって演出されるという節分行事の換骨奪胎が行われている。しかしそれはおにた・読者間で共有される真実であつて、女の子のレベルでは母親が快癒することへの祈りと、神様への感謝の気持ちの込められた豆まきであることに変わりはない。

このように最後の場面の豆まきは、その行為の意味が二重化した「豆まき」なのであるが、それだけではなく、そこにおにたの女の子への親愛の思い／通じなかつた思いが加わることで、この場面の意味はさらに重層的に構成される

のである。

三

「おにたのぼうし」は、節分の夜に物置小屋から追い祓われた親切な鬼のおにたが、自分と似たような寂しい境遇にある女の子のために、ごちそうを用意してやる。ところがその女の子に節分の豆まきがしたいと言われ、人間との隔絶に打ちのめされながらもその願いは叶えてやり、自分の真意とは裏腹に消え去っていく物語である。かくしてこの物語の読者は、おにたと女の子がどちらも思いやりのある者同士でありながら、それでも理解し合えないディスコミュニケーションを目の当たりにすることになる。文学教育の授業においては、おにたと女の子（まこと君）の隔絶した関係の読み取りは、人間／鬼という対立的な枠組に再配置され、他者性の問題がクローズ・アップされた授業が構成されることになる。

しかし、他者性ばかりを焦点化するだけでなく、「おににも、いろいろある」と主張する主人公のおにたが、節分の夜に女の子に対する葛藤を経て変容を遂げること、すなわち「おににも、いろいろある」と思っているだけに止まっていたおにたが、女の子の前に姿を現したり発言したり、そして遂には黒い豆に変身することで、自らの主張を体現するまでに至っている点に注目する必要があるだろう。勿論そのようなおにたを自己完結していると批判的に捉えることは可能である。しかし、他者同士が互いを理解するためには、それぞれがその内面世界において葛藤と変容を経て、互いに対する心理的距離を少しずつ縮めていくより他に手はない。事実おにたは、人間による排除を受け入れながら、それでも黒い豆に変身することで女の子（人間）への距離を縮めていたのである。翻つて確かに女の子には、その思いは届いていない。しかし、テキスト内にはおにたの思いを知るものが、語り手と聞き手として存在している。その思いは、語り手を通して聞き手である読者に届いているのではないだろうか。

そこで問題になってくるのは、果たして読者が、おにたという他者のために、距離を縮める手立てを講じているだろうか、ということである。さらに敷衍すれば、われわれは自分と他者がよりよく生きるために距離を縮める手立てを、果たして講じているだろうか。それは少なくとも、おにたを尊い自己犠牲者として称揚したり、(感傷の余韻の中に読みが完結している読み<sup>注13</sup>)を展開して、

おにたに憐憫の情を注いだりすることではないと思われる。

読者（生徒）には、他者（おにた）との隔絶を意識させるだけでなく、おにたのような他者に歩み寄るための思考や強い姿勢を育てたい。そこに現代社会で「おにたのぼうし」を読み、また教材化することの意味がある。

注1 あまんきみこ「あとがき」「おにたのぼうし」二〇〇二年九月、ポプラ社。

2 川井一男「教室で『おにたのぼうし』を読む——『ごんぎつね』と対照させながら」「月刊国語教育」第二六巻第六号、二〇〇六年八月一日。

3 日本風俗史学会編『日本風俗史事典』一九九四年二月二十八日、弘文堂、三五六頁。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第八巻、一九八七年一〇月三〇日、吉川弘文館、三六四頁。

4 村上呂里「『おにたのぼうし』（あまんきみこ）再読」「日本文学」第五三巻第八号、二〇〇四年八月一〇日。

5 注4に同じ。

6 田中実「メタプロットを探る『読み方・読まれ方』——『おにたのぼうし』を『ごんぎつね』と対照しながら——」「文学の力×教材の力」（小学校三年）、教育出版、二〇〇一年三月、一六、一七頁。

7 ここで読者には、すでに女の子が恐れる鬼が家に入ってきてしまったという皮肉な事態を想起するだろう。しかも、その鬼は女の子のためにごちそうを持ってきてやるような、同化志向を持つ（気のいいおに）だったのであるから、二重の意味で皮肉である。

8 鎌田均「『読み』のベクトル——『おにたのぼうし』の場合——」「日本文学」第五二巻第三号、二〇〇三年三月一〇日。

9 成田信子「新しい文学教育の地平——実践への『水路』——」「日本文学」第三四号、二〇〇四年五月。

10 中村龍一に、〈『おにた』は人間に鬼である自分を売り渡したのである。つまり、黒い豆で鬼である自分を追放したのである〉（『私』を問うこと、それは思い入れの〈読み〉から始まる——読書行為論の新しい地平をめざして——）「日文協 国語教育」第三四号、二〇〇四年五月）という解釈がある。

11 山元隆春が、〈『女の子』を救った『おにた』は、『女の子』の幸せを

祈りながら『黒い豆』に変じていき、さらに当の『女の子』の手で家の外へと撒かれることになるのだから。（中略）『女の子』に対して読者は目撃する者の立場を徹底させつつ、批判的な思いを禁じ得ない〉（あまんきみこ『おにたのぼうし』論）「広島大学学校教育学部紀要」第一部、第一九巻、一九九七年一月）と述べるように、おにたの自己犠牲に共感し同情する立場からは、逆に人間である「女の子」や読者自身に対する批判的な観点が生まれてくる。

12 注6に同じ。19頁、20頁。

13 田近洵「討論」「日本文学」第五二巻第三号、二〇〇三年三月一〇日。

#### 【付記】

「おにたのぼうし」本文は、「ひろがる言葉 小学国語3上」（教育出版、平成一五年）による。絵本版は、「おにたのぼうし」二〇〇二年九月、ポプラ社による。